境界線上を見守ろう

太った骨

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここにいる人達は学生しか戦えない。
ここにいる人達は学生しか政治に係われない。
ここにいる大人達はただ見守るだけしか出来ない。
だから、代わりに見守ろう。大人だけど学生やってる俺が。
そんな男が係わる物語。

＊筆者は元々ニコニコのほうに投稿していましたが、仕事等が忙しくエタってしまいました。が、最近になって漸く時間が作れるようになり、動画の続きを作ろうとしまし

たが、作成に使っていた紙芝居クリエイターの使い方すら忘れてしまい、このままだと拙いと思い、取り敢えずここで文章の作り方のリハビリをする事にしました。

目次

1―上

【配点】朝の一幕 ―― 1
【配点】告白練習 ―― 21
【配点】祭りの前 ―― 41
【配点】親と子と ―― 62
【閑話】気まずい ―― 84

1―上

【配点】 朝の一幕

――――――チュンチュン

「～～～～ん、朝か」

俺は寝ていた布団から体を起こす。

「ふぁ～～～～、あ゛～寝たりねぇ。……つーか、ここ何処よ？」

周りを見渡すが見覚えの無い部屋の中だ。内装から判断するに女性の部屋だろうな。アレの臭いがするが。

さて、昨日はどうしたっけか。思い出そうとすると――――

「あら。漸く起きたの」

声が聞こえたほうに顔を向けると女が立っている。インナーに上着を羽織っているだけだからスタイルがハッキリと分かる。

顔から足元まで視線を上下させると凹凸具合が良い中々のバランスだな。

あぁ、思い出した。

「出来れば裸エプロンが良かったんだが」

「朝っぱらから馬鹿言ってんじゃないわよ」
「いやいやいや、朝だからこそ言うんじゃねぇか」
　昨日の夜は賭場で大勝ちしたから、ネーちゃんがいる店で飲んだんだっけ。そんでお持帰りしたと。あれ、あっちの部屋だからお持帰りされたが正しいのか？
「それより朝ご飯の準備するから、その間にお風呂に入って汗とか流しなさいね」
「おう、悪いな」
「気にしないで。それより私は食べたらもう一眠りするけど、貴方はどうするの？」
「そうだな……、今の時間からすると午前中の授業には余裕で参加出来るか「待ちなさい」なって、どうした？」
「授業？あれ？もしかして貴方学生？」
「おう。あれ？もしかして昨日言わなかったけか？」
　目と口を大きく開けて驚いてるな。
「ちょっと貴方、歳を聞いたら２０歳って言ったわよね。この『武蔵』じゃ１８歳までが上限じゃない」
「ははは、確かに四月の頭に２０歳になってるが俺は例外だ。ちょっと訳有りでな」
　さて、このまま話しててもいいけど早く風呂に入るか。あちこち汚れてるし左の義手は特に酷いし。

イカ臭いまま授業に出たら真喜子ちゃんに殺されるしな。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「三年梅組集合――――。いい？」

黒い軽装甲型ジャージに長剣を背負った短めの髪の女、真喜子・オリオトライが言う。

「では、――――これより体育の授業を始めまーす」

そのまま授業内容の説明、品川にヤクザを殴りに行く旨と、それが報復行為だという事がハッキリすると生徒達に尋ねる。

「休んでるの、誰かいる？ミリアム・ポークウは仕方ないとして、あと、東は今日の昼にようやく戻ってくるって話だけど、他は――――」

「ナイちゃんが見る限り、セージュンとソーチョーと『カクさん』がいないかなあ」

黒い三角帽に金の六枚翼、金髪少女のマルゴット・ナイトが言う。

「正純は小等部の講師をしに多摩の小等部教導院に行ってるし、午後から酒井学長を三河に送りに行くから、今日は自由出席の筈。総長……、トーリは知らない。それと『覚さん』は昨日何処かの賭場に行くって言ってたから…」
「アイツ昨日は勝ったからな。それに伴いある商品の予約をしてきた。つまり今のアイツは金が有る」
「やったねシロ君！何だかんだで『覚さん』はお金が有るときは、大口注文してくるからいいお客様だよね」
　黒翼黒髪のマルガ・ナルゼが首を傾げながら言うと、それに続いて短髪の青年シロジロ・ベルトーニと金髪に笑顔を浮かべたハイディ・オーゲザヴァラーが発言する。
「また勝ったで御座るか。あの御人は負けたという話を余り聴かないで御座るな」
「バレないイカサマは、イカサマじゃない。というのがアイツの持論だ。拙僧等に教えてくれれば良いものを」
「つまり、負ける時はワザと負けるで御座るか」
「そうでなければ、とっくに賭場の出入りを禁止されるだろう。それでも勝ち過ぎるからブラックリストに入っていると聞く」
　帽子を深く被った点蔵・クロスユナイトと航空系半竜のキヨナリ・ウルキアガが批評する。

「と言うか、小生はあの人も一応学生なのに身内での軽いギャンブルだけでなく、賭場での大きな勝負とかは良いのか？　と思うのですが」
「なんか彼方此方に色々バラ撒いてるらしいよ！　勿論、お金じゃなくて、お酒とか食べ物とかだよ！」
『左様。そのおかげで御目溢しされる訳だ。我々も貰っているしな』
　丸い体型の御広敷・銀二が疑問を口にすると、インキュバスの伊藤・健二とピンク色粘質体のネンジが答える。
「それより。ノリキ、アンタ家が真正面でしょ。朝はどうだった？」
「特に動きは無かった。恐らく昨日は家に帰ってないはず」
　袖無しの改造征服を着たノリキが答える。
「先生、今連絡が来ました」
　眼鏡をかけた少年ネシンバラ・トゥーサンが手を挙げて発言する。ネシンバラの眼前には通神用の表示枠が出ていた。
「授業内容を伝えたら途中で合流するそうです」
「そう『井森・覚』は遅刻と。何で直接私に連絡してこないのかしら？って、アイツの自己申告厳罰は何だっけ？取り合えずネシンバラ、教室に戻ったら厳罰だからって伝えて」

「Ｊｕｄ．――――あ、先生。『この間渡した酒は美味かったか？一ダースだから飲み応えもあったろ』って返ってきました」
「――――それじゃあ〝不可能男（インッポシブル）〟のトーリについて知ってる人いる？」
「「「「「「「「流した!?　やっぱり買収されてるぞ、この教師!?」」」」」」」」

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「――――さてさてさて、いい加減何かしら見えてくる筈なんだが」
朝飯を食い終わってから、この俺『井森・覚《いもり・かく》』はそのまま走って目的地に向かう。
俺が今いる巨大航空都市艦【武蔵】は正確には準バハムート級の航空都市艦群だ。八艦同士は無数の太縄で連結しており地名を八重襲名しいて、それぞれに浅草・品川・武蔵野・村山・多摩・青海・奥多摩・高尾と名付けられてる。
その中の品川にあるヤクザの事務所か目的地って話だから、泊まった家からそこそこ近い。それに教導院に行って体育の授業はサボっても良かったけど……、
「最近、真喜子ちゃんに目をつけられてるんだよなぁ。……って、前からか」
あのアマゾネスは俺に対しては全力で攻撃してくるから色々手を打っておかないと

ガチでマズイ。先月なんか他の連中は鞘のまま殴ってるのに抜刀して斬りかかって来やがった。人目を気にもしないし、なんかパワーも上がってる気もする。未だ成長期って実際どうよ?

「そん時も一升瓶でなんとかなったから、ある意味安い女だよな。いや高いのか――――!?、よし見えた!」

少し遠くに爆ぜた光が見えた。午前中の早い時間からあんなのが起きるのはウチの連中しかないだろう。

俺の現在位置と目的地、向こうの現在位置と目的地を比較して合流できるだろう位置を考える。考えた結果、

「オイオイオイ、今のペースじゃ間に合わないじゃねぇか。走らないと駄目かよ」

どうも歩いて合流ってのは甘いらしい。

「ったく、折角汗を流したってのに。あ〝〜、諦めたら多分袋にされるよな」

あのアマゾネスなら一人袋叩きも出来る気がする。スピードが足り無いけどなんとかするだろ。

仕方ない、走ろう。速度関係の加護は無いが、体力は無駄に有る体だ。それに今回のルールなら多少無理して楽しむのも良いだろう。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

白い爆発が連続して発生する。白と黒の遠隔魔術師（マギノガンナー）の砲撃が続くが目標には当たらない。

梅組生徒達は何とか食い下がろうとするが、ジリジリ離されていく。

「だ、誰か居ませんかー!?　このままだとあの超蛮族が逃げ切りをーーー!?」

「え、…えっと、…も、もう、厳しいか、…な?」

バケツヘルムをかぶったペルソナ君の上で、両目の色が違う巫女の浅間・智と前髪で目元が隠れている少女の向井・鈴が言葉を交わす。

途中までは喰らいついてはいたが、脱落したり、速さの関係等でズルズル引き離されていく。突っ込んだ前衛組み等はかなり後ろにいる。

「あー、もう無理さね。追いつける戦闘系が残ってない」

右腕が巨大な義腕の直政が言葉を飛ばす。

残っている戦闘系だと人狼ハーフのネイト・ミトツダイラが居るが、彼女は途中から周辺が自分の領地だった為、戦闘スタイルから暴れられずそのまま離され、今は――

「ホーラ、走りなさいミトツダイラ!!　どうせ追いつけないのだから、あまり振動は立てないで!!」

「ちょっと喜美、いい加減降りなさい！　いつまで背中に乗っているの!?」
「別にいいじゃない重戦車系。役に立たなかったし。私、疲れたからそのまま運んでちょうだいな。あ、出来ればこのボリューミーな髪が邪魔だからなんとかしてくれると助かるのだけど」
「言いたい放題ですわね!?」
　などと言うやり取りを、茶色いウェーブヘアの葵・喜美としている。もう、目的などそっちのけだ。
　後衛型、非戦闘系もリタイアした生徒の回収もあって届かない。遠隔魔術師（マギノガンナー）も限界だ。

●

「ふふーん、もう限界ね」
　オリオトライは速度を落とさずに後方を確認する。生徒達はもはや遠目にしか見えない。体の向きを変え、バック走の状態でラストスパートをかける。
「なかなか良い感じになってきたけど、まだ足りないわね」
　足りないという事は、まだ進むことが出来るという事だ。生徒達の状態をそれなり程度に評価する。願う事なら今の末世の中で選べる選択肢を増やせるようもっと足掻いて欲しい。その為にも、

「もっと頑張りなさい、若人達よってね。――私も十分若いけどね！」
目的地であるヤクザの事務所が近づいてきた。後ろを向いたまま大きく跳躍する。そして事務所前に着地を決め、勢いから少し後ろに土煙を上げながら滑り込む。
「よーし、到ちゃ「ペタリ」く――――え？」
お尻に触れる感触に視線を向けると、茶髪の若者がしゃがんで揉んでいた。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

――――ムニュ、ムニュ。
「うーん、いい弾力だ」
「――――ア、アンタ、一体何してるの？」
「おう、なんか手を構えてたところに尻が滑り込んで来たから擬音を上げて触れて、そのまま揉んでいる」
俺は、何とか真喜子ちゃんより早くヤクザ事務所に到着した。と言っても、向こうもすぐに到着しそうだ。
後ろを向いたままこっちに来ているから、とっっっっても良い事を思いつき、すぐ近くに隠れて気配を消す。

　そして、高く跳んだのを確認して着地予想地点に移動した結果が今の状況だ。実に素晴らしい結果だな。まぁ、この後の結果も踏まえると、収支はプラマイ０だろうけど。
「ねえ井森、アンタこの後どうなるかわかってて揉んでるのかしら」
「はっはっは、勿論だ。俺は酒と女とギャンブルが大好きだからな。このパイタッチならぬ尻タッチ。わかっていても止められる訳無いだろうが」
「その好きなものの最初のヤツは私もそうだけど。そう、わかっててやってるんだ。今回の分は買収されないわよ」
「オーケーオーケーオーケー、俺も男だ。甘んじて受けよう。ただ…」
「ただ？」
「鞘から抜くのはやめておけよ真喜子ちゃん。このあたり血の海にすると、また学長とかに怒られるぜ」
「そう……。――――――じゃあ死になさい」
　イヤイヤイヤ、実にイイ笑顔だなオイ。これはアレだ。一発だけじゃ終わらないな。今回は何連コンボになるのかねぇ。あー怖い怖い。

……ギャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!

●

今更だが、この俺『井森・覚』は俗に言う転生をした者だ。
と言っても前の人生で何をやっていたのかは殆ど憶えていない。僅かな記憶と、いくつかの経験が体に染み付いているのと、こっちに産まれる直前でのやりとりが転生者だと判断している根拠だ。
産まれる前に何があったのかと言うと、気がついたら真っ暗闇にいた。
熱くもなくて寒くもない。何かに包まれている気がしないでもないが、体が存在している感覚が無いあやふやとしか表現出来ない状況だ。

そして自分が何なのかがわからない。

だと言うのに、その事に対して恐怖を憶える事もない。ただ思考を走らせるだけだ。

色々考えてみたら、歳は４０は過ぎてたとか、毎朝毎晩に体を動かしてたとか。その程度は思い出せた。そんな事から一応は生き物だったのだろう。

『――次は、コレか』

いつか急にそんな声が聞こえてきた。いや、聞こえたというよりは響いてきた、というのが正しいか？

『――ほう、完全に洗浄されていないではないか。とは言ってもカス程度の残滓がこびりついてるだけだな』

待てやオイ。誰がカスだ。

『――普通平凡な人生を真面目に送ってきただけか。』

人の話を聞け――――って、あれ？　俺のことを知ってる？

『――成人してからの趣味が体を動かす事。だから健康体操代わりに中国武術と。太極拳ならわかるが、形象拳や八極拳とかはチョイスが少しおかしくないか？　他にも色々やってるな』

お前が誰か知らないが答えてくれ!?　俺は誰だ!!　何だったんだ!?

『――ふむ。そこらにあるようなつまらない人生だと思ったが、ところどころでぶっ飛んだ事をしてるな。……いいだろう』

オーイ、俺は全然よくないぞ!?

『――――それならコレが良いか。成人前に読んでた本からコレをあててやる』

な、何を当てる気だ？

『『『『『『さぁ――――！　次の生でも思うがままに通したまえ!!』』』』』』

……で、気がついたら乳を吸ってた。

ここで漸く俺は生まれ変わったんだと理解出来た。乳吸ってたのは赤ん坊だから飯を食ってた訳だ。勘違いしてはいけないぜ。因みに恥ずかしいとかの感情は沸かなかった。

で、赤ん坊だから全然動けないから色々考えるんだ。あの時の声の内容とか、これからどうして行こうかを。

その度、知恵熱出して両親を心配させたけど。

取り合えず、前は真面目な人間だったようだから、少しばかり暴走してもいいだろう。思うがままに通せって言われたし。

だから、ハイハイが出来るようになったら彼方此方に移動しまくった。隙を見て勝手に外に出たり動物に襲われたり、階段を上がったり下りたり落ちたり。

その度、怪我して両親を心配させたけど。

けど、軽い怪我しかしなかった事や両親の話してた内容から、どうやらこの体はかなり頑丈らしい事がわかった。加護だなんだとか言ってもいたけど、その時は意味が分からなかった。

そうそう、新しい親父もお袋も良い人だった。一人っ子だからってのもあるけど、二人共俺を愛してくれてたし、俺も二人が大好きだった。

……あぁ、『だった』だ。暫くの間は何事も無く平和に過ごしてたんだけど、お袋は俺が小等部最後の年の時に事故で亡くなった。

俺もその時巻き込まれて昏睡状態になったらしく、病院の布団の上で目を覚ましたら丸2年が経過していた。いや、ホント、勘弁して欲しいよな。

親父は俺の治療費とか入院費とか勤めてる仕事の都合とかで彼方此方に転々と出張してた。起きた後に通信でだけど顔を合わせた時ボロボロに泣いてた。けど笑ってくれた。

今でもそのまま外国を廻らないといけないとかで、一箇所に落ち着くことが出来ないらしい。それに付き合わせることはしたくない。ということで、仕方がないから俺は一人で暮らす事になった。それでも年に1～2回はなんとかして直接顔を合わせている。

少し話を戻すが、昏睡の関係で教導院をどうするかと問題も上がった。俺がいるこの【武蔵アリアダスト教導院】では学生は18才で卒業っていう制限がある。他の国は無

制限だというのに、訳ありだとは言えおかしいだろと俺は思う。弱らせる為、って臆病だなっつーのが感想だ。

２年分の学業の遅れと制限とでどうバランスをとるか上の連中が話し合った結果、俺は留年という形で教導院に中等部の初年から改めて通う事になった。この事は外国のお偉方から理解を得ているらしい。

それで今は三年梅組の一員として『おーい、覚さーん』――――って、誰か俺を呼んでいるのか？

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「――――ん。ん、ん？　あぁ、気絶してたのか」

地面に倒れ伏してた男が体を起こす。

「お早う御座います覚さん」

眼鏡をかけた小柄な少女アデーレ・バルフェットが挨拶をする。

辺りに目を向けると梅組の生徒達がいくつかのグループに分かれて話している。

「おう、お早うさん。今日も元気かバルフェット」

「Ｊｕｄ．、少し前に先生にふっ飛ばされましたけど元気です！」

「そうか、元気なのは良い事だ」
　そんな言葉を覚とアデーレは交わす。
「そう言えば覚さん、制服は？」
「ん？　あぁ、昨日出かけたままだったからな」
　下は兎も角、上は白に青のラインが入った羽織りだった。
「教導院に戻る時は、これじゃあ不味いな。『千里』、出してくれ」
『ニャー』
　虚空から出て来たトラ猫型走狗（マウス）が制服の上着を取り出す。
　出された上着を着て立ち上がる。武蔵アリアダスト教導院の一般制服と基本は同じだが、裾が膝まで届く程長く、右袖は肘まで捲られ、左袖は肩口から全く無く、銀色に黄色と黒のラインが入った義碗の全てが外に出ている。
「あんがとさん。つーか、今、どんな感じよ？　なんか葵（弟）が真喜子ちゃんに回し蹴り喰らって回転しながら飛んだけど」
「えーと、取り合えず、先生がヤクザ倒したら総長が出てきまして。そしたら先生のオ、オッパイを揉んで重大発表して」
「馬鹿が蹴り飛ばされたと。あと、一々乳のところでどもるな。けどそうか――――」
　後頭部を軽くかくと……、

「葵（弟）に乳を揉まれて、その前に俺に尻を揉まれ「そ、それは本当で御座るか!?」て、散々だなって、急にどうした？」
　大声をあげた点蔵が詰め寄ってくる。
「か、覚殿！　先生の尻を揉んだとは本当で御座るか!?」
「声がでけーよクロスユナイト。そんな事で騒ぐからいつまでたっても童貞なんだぞ」
「ど、どど、ど、童貞かどうかは、関係無いで御座ろうが!?」
「オイオイオイ、本気で言ってんのか？　女に触れたとか簡単な事で騒いでるのは、女の視点からすりゃみっともないだろうが」
「……え、マジで御座るか？」
「マジに決まってんだろ。なぁ、バルフェット」
　点蔵が勢いよくアデーレののほうに顔を向けるが、
「ジ、Ｊｕｄ．、ノーコメントでお願いします」
「突き飛ばせばいいのに、お優しい事で。ほれ、泣くなクロスユナイト。茶をやろう。バルフェットも」
「――Ｊｕｄ．、有り難く貰うで御座る」
「有難う御座います。――って、またこれですか」
　覚から渡された缶のラベルはこう書かれている。――まロ茶と。

「知り合いからよく送られてきて、余ってるんだ。処理もかねて飲んでくれ」
「Ｊｕｄ．、喜んで手伝わせてもらうで御座るよ」
「手伝うのは良いんですけど、いつも飲んで大丈夫なのか疑問に思うんですよね。　材料的に」
　その言葉に缶に書かれている原材料名に目をむけると、こう書かれていた。
【原材料名：葉っぱしか入ってない】
「か、か、覚殿!?　これ大丈夫で御座るか!?　こう、中毒とかになったりしないで御座るか!?」
「いえ、第一特務。いままでに結構な回数飲んでましたよね」
「何回も飲んでたで御座るが、原材料なんて気にしないで御座るよ!?」
「大丈夫だバルフェット。一定間隔でクロスユナイトに飲ませてるが、今んとこ中った事ないぞ」
「毒見!?　自分、毒見役で御座るか？」
「おう。まぁ、気にするな――――、って、そうだ。オーイ、フルブシは居るかー？」
「ここに居ますネー、カレーの注文ですネー」
　頭にターバンを巻いた少年ハッサン・フルブシが近づいてくる。
「Ｊｕｄ．、正解だ。昼飯用に後で頼む。勿論、特盛りで」

「了解ですネー」
「変なモンは入れるなよ――――――と、そうだ。なぁ、バルフェット」
「何ですか？」
「葵（弟）の重大発表ってなんだ？　また馬鹿をするのか？」
「え、えーと、ですね……」
　少し表情を硬くすると…、
「告白するそうです。――――――――ホライゾンに」

【配点】 告白練習

外での授業を終えて教室に俺達は戻ってきた。そのまま一応授業を受けて、今は向井が指名されてご高説に入るところだが……、授業中とは思えないくらいに賑やかだよなぁ。

まぁ、騒動の原因は葵（弟）だし仕方が無いか。それにしても――――、

「――――告白ねぇ」

教室までの帰りの途中で告白の詳細を聞いたが、死んだ人間に告白ってのはどうなんだ？

ホライゾンって名前を言われても、俺には詳しくはわからない。昔に亡くなった女の子が梅組の大半にとって大切な存在だったらしいが、その頃は、歳が違うから俺はコイツ等とつるんでなかったし。

ただ、立ち止らずに進む為なら、うん、確かに必要な行為だろう。

けどよ、明日告白するって宣言した人間が、エロゲーの説明書を読んでるのって実際どうよ？

「ああくそ透かしてみてもこの委員長攻略出来ねえ！　それにこのゲーム、主人公の名

前が変更出来ねえ！　初プレイは点蔵の名前を打ち込んでバッドエンドにしてやろうと思ってたのに！」
「な、何で自分にするで御座るかトーリ殿は!?　拙者は金髪巨乳担当で御座るぞ！」
「大丈夫だよ安心しろよ点蔵！　二週目はウルキアガの名前にして男キャラを攻略すっから！」
「貴様あー！　拙僧は姉キャラ担当と決まっておろうが!!」
「あ、何言ってるんだよオメェ？　それは三週目にトカゲにいの名前でやるって決まってんだろ」
　オイオイオイ、何で俺の名前がそこで出るんだよ。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「待て待て待て、俺の姉担当ってのは、いつ決まったんだ葵（弟）よ」
「え？　けどトカゲにいは、いっつも年上の女を口説いてね？」
　井森⇒イモリ⇒トカゲ、と連想したらしい。
「その通りだ、拙僧の畑を荒らす異端者め。異端審問にかけられたくなければ、収穫方法を教えてくださいお願いします！」

「馬鹿言ってんじゃねぇリアルプラモ。それに、俺は年上は熟女から年下は幼過ぎない程度まで、多種多様に全然ＯＫに決まってんだろ」
「おーぅ、流石だぜトカゲにぃ！　格好良く言ってもセリフ自体は馬鹿だな!!」
「おう任せな。ただ――――」
「ただ？」
「乳はやっぱりデカいほうが良い!!」ドーン!!
　周りで聞いていた女子はドン引きである。
「あれだ。デカいモンを求めた結果が、年上ばかりに見えただけだろ」
「なるほどー」
「だいたい小さくても良い。って言ってる奴は、生物学上から見ても変だし、触ったことすらない阿呆の戯言だろ？　なぁ、御広敷」
「な、何でそこで小生の名前が出るのですか!?　小生、年増は勘弁ですし、第一別に触ろうとはしてませんよ！　愛でるだけです!!」
　白い目で見られてるが、当人は全く気がついていない。
「そもそも大と小じゃ見た目が違うだけじゃない。いくつか例を挙げるとするなら、まずは弾力」
「「弾力!?」」

「指のめり込み具合がまるで違う。小さくても凹むが、大きければより凹み、それが掴む、揉むという行為に発展する！」
「け、経験者の言葉は、重みが違うで御座るな…」
「そしてプレイの幅が大きいほう「黙りなさい」グボーーー!?」
　途中から立ち上がって力説していた馬鹿が、オリオトライに吹っ飛ばされる。かち上げるアッパースイングによって天井に激突。そのまま床に落下するが――
「お〝お〝お〝、し、芯にひびくぜ…。結構きついぜ真喜子ちゃガフッ!?」
「黙れ！　って！　言ってる！　でしょ！　井森」ボスッ！　バコッ！　ボコッ！　ガコッ！
「そう何度も殴れば、悲鳴が続いて黙れないと拙僧は思うのだが」
　と、彼等の騒ぎに対し、シロジロが顔を上げた。彼は据わった目でトーリ達を見て、
「静かにしろ。今仕事中だ。今回の寄港は何故か三河からの荷物が来る割に此方への発注が無くてな、他との倉庫確保の競争が激しい。だから後にしろ。――ハイディ、何だその目は」
「んー、あのねシロ君、今、授業中でもあると思うんだけどな」
「って、待てベルトーニ。仕事するのは構わない「いや、駄目だろ」が、俺が昨日頼んだのは大丈夫だろうな」

「任せろ井森・覚。後は納品されるのを待つだけだ」
うるさいよ君ら、とネシンバラが呟くが覚達はやはり気にしなかった。
先程、ご高説を指名された鈴は小さく笑って口を開いた。
「ええと、い、いいですよね？」
いつも通りの光景である。

●

「あー、カレーうめぇ」
「当然ですネー」
「あのー、何で今ゴハン食べてるんですか？」
「仕方ねぇだろネシンバラ。真喜子ちゃんと葵（弟）のせいで空いた穴の仮処理をして、昼飯食い損ねたんだからよ」
「はぁ、わかりました。じゃあ、気を取り直して、これから臨時の生徒会兼総長連合会議を行います」
午後をやや過ごした空の下にある木の橋上、武蔵アリアダスト教導院の正面橋架、正門側に降りていく階段の上に、制服姿の影が幾つかある。

トーリを中心としたいつもの面々だ。
「本日の議題は〝葵君の告白を成功させるゾ会議〟という事で。書記である僕ネシンバラの提供でお送ります。――皆、適当に弄っちゃっていいよ？　では葵君、どうぞ」
とりあえず座らされたトーリが、傍らに座る点蔵を見る。
「なあテンゾー、告白って基本的にどうやんの？　オマエ、回数だけはこなしてるだろ？」
「い、今自分、いろいろ否定されて御座るな!?　そうで御座るな!?　と言うか、こういうのは、色んな女性に手を出してるあんちくしょうな覚殿の担当では御座らんか!?」
「トカゲにいはトリに決まってんだろ。だからオマエ前座な？」
「さ、最悪で御座るな!?」
ややあってから点蔵は腕を組み、右の人差し指をたてると、
「・・・ここは一つ、手紙を書いてみてはどうで御座るか？」
懐から手帳とペンを取り出すとトーリに手渡した。
「前もって伝えることを書いておいて、コクる代わりにそれを手紙にして渡すで御座るよ」
うむ、と点蔵は頷き、
「さすれば、絶対にトチることとは無縁で御座るし、恥ずかしくばそのまま帰って宜し

「はい、ダウト」い、って駄目出し!?　誰で御座るか!?」
　辺りを見回すと、覚が爪楊枝を使いながら手を挙げたいた。
「俺だ俺。なぁ、クロスユナイト。恥ずかしいからって帰っちゃ駄目だろ。だから失敗すんだ、この根性無し」
「つぐ!?　そ、その道の権威からの駄目出しは効くで御座るな」
「因みに、恥ずかしがるのが駄目な理由は、なんなのだ?」
「馬鹿野郎。告白の時点でするほうも、されるほうも、両方とも恥ずかしいんだよ。何故って?　愛を語ってるからだ」
　覚の話は、トーリ達の動きだけでなく、帰ろうとしていた周りの生徒の足を止めていた。
「なのに、する側が途中で終わらしてどうすんだ。される側が一人残って無視されたってことは、ホントは好きでもなんでも無いってことになんだろ。むしろ直接渡す勇気が有るなら、そのままいけよ根性無しがって話だな」
「ヤベェ、ガチガチの正論だ…」
　聞いてた男連中は、頷いてたり、メモを取ったり真剣だ。
「告白に手紙を使うのは別に構わないだろうよ。ただ、なぁ、直接言葉にされたほうが、女からすれば嬉しいと思うぜ。オーゲザヴァラーはどうよ?」

「私？」
覚が、ハイディを指差して問いかけると、
「うーん、やっぱり顔を合わせて言ってくれたほうがうれしいかな。あ、でも、手紙もシロ君からなら嬉しいのは変わらないし、シロ君以外からの手紙でも、貰った手紙を晒せばお金になるから、やっぱり嬉しいかな」
「後半外道発言が入ってたが、そんなもんだ」
周りで聞いてた者は、感嘆の声をあげる者と、ハイディを白い目で見る者に分かれたいた。
「だからクロスユナイト。まずオメェは、振られてもダメージが少なくなるような言動の、負け犬根性をなんとかしないと駄目だな」
「なるほどなぁ。……やっぱりテンゾーはダメダメ忍者だったか」
「拙僧も注意しないといかんな。こんな忍者とは一緒になるのは御免だ」
「き、傷口を、これ以上広げないで欲しいで御座るよ…」
「つーか葵（弟）、コクる女のどんなとこが好きなんだよ？」
トーリに視線が集中すると、頭に手を当てながら唸りだす。
「う～ん、って言ってもなぁ、好きとか嫌いとかの感情の働きって、上手く言葉に出来ねぇもんじゃん？」

その言葉に、橋の欄干に身を寄りかからせていた喜美がトーリを見て、
「フフフ愚弟、取り合えずそこの負け犬忍者が手紙とペンを出したんだから、それに箇条書きでいいから書いてみたら?」
「ええ? 何かまた姉ちゃんは難しいこと要求すんなあ。清純な俺の精神の働きを簡単に上手く言葉に出来ると思ってんのかよ!?」
・顔がかなり好みで上手く言葉に出来ない
・しゃがむとエプロンの裾からインナーがパンツみたいに覗けて上手く言葉に出来ない
・ウエストから尻のあたりのラインが抜群で上手く言葉に出来ない
「う〜ん、やっぱ清純な精神は上手く言葉に出来ないもんだなぁ」
「――――ず、随分と具体的で御座るよこれ! しかし即物的」
「ふむ…。拙僧、思うところが少しあるが、それより権威からはコレはどんなものなのだ?」
「葵(弟)もさっき言ってたが、なんで俺が権威になってるんだよ。さて、そうだなぁ――――」
覚はトーリが書いて内容を見て考えると、
「見た目は、エロさのある実にいい女ってことを理解出来るな。素晴らしい」

「「「「素晴らしいの!?」」」」

「当たり前だ。最終的にはヤることヤんだろ？　だったら別にいいだろうが」

覚の台詞に、男連中は女性陣からの視線を気にせず頷いている。

「それに、オイ男共。――――美人とブサイク、好きになるならまずどっちよ？」

「それは、やっぱり、なぁ」

「だろ？　顔より中身なんて言っても、結局は最初はそこなんだよ。まぁ、付き合いが長くなれば、そうでもなくなってくるけどな。だから葵（弟）はそこまで間違ってないな」

「つまり、人は見た目だと？」

「違う違う違う。人は見た目じゃねぇって。――――――第一印象だ」

「「「「同じだ馬鹿野郎」」」」

「井森の発言は横に置くとして、拙僧からすればトーリの好意には不可解な点がある」

ウルキアガが一歩前に出ながら話す。

「このオッパイ県民が、何故胸に対する言及が無いのだろう」

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

なんか、告白から話の内容がずれていくなぁ。まぁ、いつものことか。

つーか、本気の恋愛なんて俺はしたこと無いってのに、なんで話をふってくるかねぇ。面倒臭ぇな。

「ちょっとトカゲ？　アンタはどうなのよ？」

「急になんだ葵（姉）」

この姉弟は、いつまで人のことを爬虫類呼ばわりするのかねぇ。

「愚弟は、オパーイは揉まなきゃわからないって言ってるけど、トカゲはどう？」

「あぁ？　揉まんでも、見りゃある程度わかるだろ。お前とか、浅間とか。動く度に揺れんだし」

「こらー！　勝手に人のカラダネタをやらない！」

おぅおぅおぅ、校舎の三階の窓から顔を真っ赤にして身を乗り出してやがる。危ないだろ。

しかし、浅間の乳は、どんなモンなのかね。やっぱり、若いからマシュマロじゃなくグミな弾力か？　年くったら絶対垂れるんだろうな。

「井森さーん！　なんか変なこと考えてませんかー!?」

「ん？　何のことだ？」

危ねぇな。どこの楽園の素敵な巫女だよ、いい感してやがる。

――って、誰かコッチに来るな。アレは……、

「学長と、ミトツダイラか」
「――？　こんなとこに座り込んで何してるんですの？」
「ちょっとな。しかし、アレだな。髪がボリューミー過ぎるから、反比例して胸が無いのか？」
「で、出会い頭に酷い侮辱ですわね!?」
　だって、肉の大量摂取と一緒に、デカくする謂れの物もオマエが取ってるのを知ってるしなぁ。因みに、牛乳はデマだぞ。
「それよりもだ、ミトツダイラ荷物持ってるし、学長と三河に降りるのか？」
「松平分家を預かる騎士の私が、Ｐ．Ａ．ＯＤＡへの献上物を作る三河に行くわけないでしょうに。ただ、分家としての権利の関係で、降りる酒井学長に証書などが必要でしたので」
「あれ？　学長って、昔はスゲー人間だったみたいだけど、今は左遷されて役立たずな冴えないオッサンだろ？　なのに、手続きが必要なのかよ」
「オマエさんは本人が居る場所で、よく言えるもんだねぇ。井森」
「だって事実だろ？　何の用事か知らないが、どうせ、最後は酒でも飲んでくるんだろ。御土産宜しく」
　土産は食い物限定で。

「買ってこないよ。ま、昔の仲間に呼ばれてね。それでも、さっさと帰ってくるよ」
確か、昔は学長は三河にいて、松平を支えてたんだっけか？　んで、今も三河には松平の当主が居ると……。
「なぁ、ミトツダイラ。三河の当主って、なんて名前だっけ？　松平――――」
昼前に流れた放送で、名乗ってた筈なんだが忘れた。
「【松平・〝傀儡男（イエスマン）〟・元信】公ですわ」
「そうだったそうだった。で、そのオッサン、少し前から自分の土地の人間を追い出してんだ」
「え？　ええ、側近以外の人は殆ど居なくて、必要な人材は自動人形に置き換えたようです」
こっちをジロジロ見てよく知ってるな、って顔だな。まぁ、普段から碌な言動してないからな俺。
「そんな事してる理由って、知ってるか？」
「いえ。流石にそこまでは存じませんわ」
分家筋って言っても外から封地された名前だけの外様みたいなもんだし、深いところまでは知らないか。
「それにしても、よく知ってますわね。そういったことには興味が無いかと思っていた

のですけど」
「ん、ん、ん。まぁ、そう思われても仕方が無いんだが……。ほれ、今晩に花火とか上げるって話とかがあったからな」
色々知ってた方が、有利になるからな。それに、なんか嫌なかんじのする三河に行くなら、備えておかないと怖くてしょうがない。
「それより、見ろよアッチ」
俺が葵（弟）のほうを指差すと、
「彼女が別人、他人のそら似という可能性だって有る」
「解ってるさ。だから一年見てたんだ、ストーカーのように」
葵（弟）が告白相手について学長と話してやがる。いや、ストーカーは駄目だろ。って、学長は告白相手を知ってるのか？
「もし彼女がホライゾンなら、俺は〝彼女に近づく資格も無い〟って」
……普段の馬鹿さ加減からは想像出来ない台詞だな。
「…でも、段々と、〝いてくれるならそれだけでいい〟って思って、やがて、話をしたいとか、触れてみたいとか、そう思って、今はこう思ってんだ」
……ホントになぁ。
「もし彼女がホライゾンじゃなくても、何も出来ねぇ俺だけど、一緒にいてくれねぇか

なぁ、って」

…こういうところを見せてれば、もっと周りに信頼されるだろうに。それより、だ。

「あんな風に思われるのは、女としてはどうよ？　ミトツダイラ？」

「っえ!?　え、あの、その、とても嬉しく思いますわね。ええ、総長が言っているとギャップが凄いですけど」

うっすらと顔が赤くなってるぞミトツダイラ。

「そうかもしれないが、ホライゾンじゃなくても、って言う時点で死んだ女と比較するのは、ぶっちゃけどうよ？　思い出なんか美化されんだから勝てるわけ無いだろうに。そんな事だとその内に別れるぞ」

「へ、変なところでシビアですわね…」

まぁ、なんだ。まだまだ若いんだし、そのまま青春して挫折しても大丈夫だろ。

ん、葵（姉）が近づいてきたぞ。

「それはそうと愚弟、まだ問題が一つ解決してなかったわね。――――――アンタが堅めでいけるかどうかの」

「堅め？」

あ。馬鹿、ミトツダイラ。今反応すると――――

「ミトツダイラ。今愚弟が抱えてる困難に対し、ミトツダイラが適格者なの」

間違いなく巻き込まれるのになぁ。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「困難とか適確とか、大袈裟だとは思いますけど、庶民の困難を救わぬ騎士はおりません。この私、ネイト・ミトツダイラが尽力を尽くしますわ」
「あー、あー、あー、ミトツダイラよぉ、少し考えてから発言したほうがいいぞ」
覚が片手を振りながら、止めようとするが、
「失礼ですわね。私は皆さんみたいに、考え無しみたいに言わないでくださいませんか。さぁ、総長、何が望みですの？」
「うーん……、何というか、言いにくいんだけどよ？」
「ハッキリしない男ですわね。――もっと堂々となさい」
「いや、ハッキリ言うと怒る。堂々と言うと、――殺されるね俺は」
は？　と首を傾げたミトツダイラは、周りを見渡すと、いる面々も喜美と覚を除いて頷いていた。
悪い予感がするとミトツダイラは内心で考えた。つい先日もトーリ達が原因の凄まじい営業妨害を受け、ミトツダイラ家は取引先の一つを失った。

だから、という訳ではないが、
「では、安全の為に先に検証しましょう。私に何を望むんですの？」
「ちょっと、練習というか、稽古の相手をして欲しいわけでさ」
「…それはつまり、私を告白相手の代用にするということですのね？」
「うーん、っていうか、見定めたいというか…」
「Ｊｕｄ．、まぁ、よく解りませんが、宜しいですわ。このネイト・ミトツダイラ、貴方に稽古をつける為に――――」
ミトツダイラは考えた。どう言うべきか。
今回は稽古をつけるのだから…、そう考えて告げた。
「ええ、この私が、――――この胸を貸しましょう」
言った瞬間、周囲が驚きの声をあげた。
「「「「マジで!?」」」」
響く周りの驚きに称賛の色も混じり、ミトツダイラは軽く狼狽し、念の為に確認を取るも、
「あ、あの、私、総長の告白の稽古の為にこの胸を貸そうと言っただけで――――」
「二度言った！　二度言ったぞ！」
「騎士だからかしら。思い切りが凄いわ…」

「立場的にも硬度的にも、まさに人間の盾！」
「それだと、軽く立場が喰われてねぇか？　俺とか、バルフェットとか」
最後によくわからない発言が出てたが、概ね期待されている観はある。
そんな中、トーリが酒井からの去っていく姿を見送るとミトツダイラに近づいていく。
「じゃあ、ネイト、一丁やろうか。――殴るなよ？」
「これは告白の稽古なんでしょう？　だったら、殴ったりしませんわ」
「なら、安心していきますか！」
言葉と共に、トーリの両手がミトツダイラの胸に触れる。
「……え？」
静寂が広がっている。周りの目は二人に集中し、トーリは更に自分の耳を胸に押し付ける。
「……えっと、これは――」
ミトツダイラの顔が羞恥でゆっくりと赤くなっていく。だが驚愕で体は動かない。
どうすればいいのか考えると、トーリはゆっくりと離れていった。
その動きに合わせて周りがトーリに注目すると、
「…どうで御座るか、トーリ殿？」

ああ、と頷くと、親指を立てて笑顔で告げる。
「ノーブラだった!!」
個人情報の暴露である。
「つーか、アレだな!?　トカゲにいの言うとおり、無くても凹むんだな!!」
「当然だろ。基本的に女の体は男より柔らかいんだからな。つーかミトツダイラよ、幾ら胸に必要が無いからってノーブラはやめて着けとけよ。今は、寄せて大きく見せるブラも有るんだからよぉ」
「何ソレ!?　それ着けて男騙すのかよ!　酷くね!?」
「馬鹿野郎。男だったら、女の可愛い嘘には騙されてやれ」
トーリが覚と阿呆なやり取りをすると、ミトツダイラに顔を向け、
「サンキューなミトツダイラ!　お前のおかげで、自分探しが一つ終わった!――――――俺、大丈夫だ!」
「全く駄目ですわよこの馬鹿あああーーーー!!」
「ぶへらーーーーーーー!?」
叫びと同時に、ミトツダイラは体を捻りトーリを蹴り飛ばす。殴らないという約束は守ったようだ。
そのまま吹き飛んでいくトーリは、

「っバ!?　オメェ、こっち来んブフオオオーーーー!?」

その先にいた覚を巻き込み、勢いが落ちる事無く二人で飛んだ先にあった校庭に叩き込まれた。

「本当に昔から馬鹿ですわね！　余計なことを言った人と一緒に暫く反省してなさい！

――――全く」

ミトツダイラは一息つき、目尻に浮いた涙を拭うと、

「――――明日、フラれてしまえばいいんですわ!!」

【配点】 祭りの前

「あはははは！　相変わらず馬鹿ねぇ。なに巻き添えくらってるのよ」
「いやいやいや。運が悪かっただけで、好きで馬鹿やった訳じゃないぜ真喜子ちゃん」
臨時生徒会が終わって夜まで少し時間が出来ちまった。
これから賭場に行くには時間が中途半端だから、俺は食堂で軽く一杯引っ掛けようとしてたんだが…、そしたら、そこで飲んでた酔っ払いな真喜子ちゃんを見つけたから軽く飲みながら駄弁ってる。
真喜子ちゃんはポン酒≪熟年離婚≫と漬物で。俺はカボスビールとハムカツ。ビールに揚げ物はジャスティスだろ。
「それより井森。先生、そろそろ新しいのが飲みたいんだけど」
「抱えてる一升瓶の中身がまだまだ残ってるのに、何で俺に一本奢らせようとするのかねぇ」
「給料日までまだあるから、奢ってね。あ、おばちゃーん。お酒とおつまみ追加でー！」
「生徒にたかるなよ。つーか、強制かよ」
俺の許可も取らずさっさと頼みやがった。食堂のおばちゃんも受けるなよ。

「はぁ、仕方ねぇな。あ。おばちゃん、俺もビール追加で。それより、代わりに何か支払えよ。金以外でいいからよ。……なんだったら、体で――――ゴフッ!?」
「そうねぇ……」
「な、殴って放置は酷くねぇか…」
一升瓶を手放さずに腕組んで考え込んでる。つーか、誰も取らないから離せよ。
少し経ったら、あ。って顔を上げてきた。すんげーイイ顔だな真喜子ちゃん。
「あのね、きょう戻ってきた東なんだけどね」
「あぁ。授業終わってから見てないけど、どうかしたのか？　夜にまた会う事にはなってるけど」
梅組の一員である東。元皇族で、帝の子の上に半神で還俗してきたっていう色々ややこしい身分の奴だ。
「それがね、少し前にこの食堂に顔を出してきたんだけど――――――」
「なんだなんだなんだ、それは。ちょっと面白そうじゃねぇか」
ここに顔を出した理由を真喜子ちゃんから聞いた俺は、すぐに東のところに向かおうと思った。
いやぁ。イイ暇潰しになりそうだ。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「ねぇガっちゃん。今、上でやってるレース、後で出る？」
『勿論。一仕事終えてから行きましょう。新作の費用も少し不足気味だし、〝提督（アルミランテ）〟や〝海兵（マリネ）〟相手に稼ぎましょう』
「あ。カクさんに私達も出ること伝えないと駄目だね」
『そうね。伝えて、胴元の一人になってもらって、利益を私達にも回してもらいましょ』
「カクさん、なんだかんだで多芸だよね。年上だけど私達と人生経験年数は一緒なのにね」
日が落ちる少し前、配送業中のマルゴット・ナイトは展開している魔術陣（マギノフィグーア）から聞こえるマルガ・ナルゼの声に笑顔で返す。
仕事を終え、レースに途中参加し勝ったらさっさと夜のイベントに向かおう。そんなことを考えながら配達物が入ったカートを押し歩く。
残っている荷物を確認しながら進むと見知った顔が道の向こうに見えた。
男子学生服をまとった細身の生徒会副会長、本田・正純だ。
「あ。セージュンだ」
いきなりの声に正純は体を震わせあたりを見回し、金の六枚翼のマルゴットを確認す

ると近寄っていく。
「……バイトか？」
「ううん、ナイちゃん正業。セージュンはどうしたの？」
「あ、ああ、三河の帰りだ。それで、まあ、後悔通りの方に行こうと思って」
「そうなんだ。だったらちょうどいいや」
　マルゴットはカートから荷物を取り出して渡してくる。
「ハイこれ」
「ん？　何だこれ？」
「生徒会宛の荷物だよ」
　受け取った荷物の配送表に書かれていた文字を確認すると、正純の額に皺が寄る。
「な、なんでエロゲーが生徒会宛になってるんだ!?」
「知らなーい。一応、後悔通りにソーチョーいるみたいだから、渡した時に聞いたら？　どうせ、ソーチョーが頼んだろうし」
「な…、あー、わかった。こっちで預かろう」
「アリガトー。これで荷物はラス一なんだよね」
　最後の一個を取り出す。分厚目の封筒の宛名が目に入る。宛名は梅組のクラスメイト宛だ。

「……井森か」
「そーだけど。あれ、セージュンカクさんの事嫌い？」
苦虫を噛んだような顔の正純に問いかけると、
「あぁ、まぁ、嫌い…というか、苦手な部類に入るか」
そんな答えが返ってきた。
「そうなの？」
「ああ。初対面の時に色々あってな。それにあの男、普段から生活態度が悪いだろ。授業も時々さぼって、その理由は二日酔いとか、朝まで、その、女の人と一緒にいたとか」
「あー、まーそーだねー」
「それに、人の顔を見るたび第一声は行き倒れとか貧乏人だぞ！　失礼だろうが！」
「それは、セージュンが一部悪いと思うなー」
本にお金をつぎ込みすぎて、いつも金欠になってる正純も悪いとマルゴットは思う。
まぁ、それでも正純の理由に軽く納得する。
無駄に図体がでかく、暴力などは振るわないがセクハラトークはかます。特にトーリ達から頼まれて、周りに女子がいるのもかまわずエロトークをしようとする。
それらを考えると好かれる要素が少ないと思った。
「けど、まぁ、ちゃんと話してみるといいかな、ってナイちゃん思うよ？」

「ん、そうか？　そう言えば、他の皆はあまり嫌ってないみたいだったな」
「んー。実際話してみると結構面白いし、相談事をすると嘘もつかずに真剣に取り合ってくれるよ」
　実際ちょっと困った高等部に上がってすぐの時、装備やら術式の改造とかでお金を使い果たし、ひもじい生活だった。そして断食三日目、水だけしか飲んでなく人目のないところで野草を採ろうとしていると、覚に見つかり暫くの間ごちそうしてもらった事を思い出す。
『さぁ、飯だ飯』
『ご飯はいいんだけど、またお肉？」
『Ｊｕｄ．好きだろ、肉』
『好きだけど、ナイちゃん乙女として食べた後が怖いかなーって』
『減った分、食って戻せ。つーか、むしろ胸周りを増やせ。特にナルゼ』
『黙れ木偶の坊。ネタにするわよ』
　三食全てにお肉が出て、お給料が入った後も断食して身を削らなくちゃいけなくなったのは忘れよう。因みに、肉は肉でも鶏肉が出なかったのは気遣われた結果だろう。
　相方と合わせて他にも助けてもらったことのあるマルゴットからすれば、嫌いにはなれない相手だ。彼氏にしたいとは間違っても思わないが。

「それにカクさん、ソーチョーと違って突拍子もない行動とかしないし」
「比較対象がアイツだと、誰でも真面に見えると思うぞ」
「ま、ま、兎に角、これは後で会うからその時に渡すことにして。これでナイちゃんお仕事終了ー」
　そんなことを言いながら封筒をしまうマルゴット。正純はそれから思い出し、
「そういえば、酒井学長から聞いたが、今晩に集まるらしいな。あの男も参加するのか？」
「うん。少し遅れるかも、って聞いてるけど。セージュンは？」
「私は遠慮するよ」
　えー残念。そんなことを言いながらマルゴットは集まる前のレースの準備を始める。
「生徒会役員が全員馬鹿騒ぎする訳にもいかないしな。それより、井森が遅れるって、また何か企んでるのか？」
「違う違う。カクさんがやるとしたら、暇潰しだよ」
「……それは企んでるのとは違うのか？」
「違うと思うな。だって、人のためになる暇潰しだろうし」

「――で、話はついたのか？」
「ええ、取りあえず握手を終えたところよ。それより――」
「ちょっと聞いてよ井森。さっきポークゥさんと話してた時に思ったんだけど、女の人って男に点数を付けるのって当然の行為なの？」
「んー、そうだな。点数つーか、評価を下してくるのは当たり前だろうな」
「あ、そうなんだ。んー、やっぱり余が知らなかっただけなんだ」
「受け取った点数は参考にしておけよ。ポークゥなら割と基準になるような評価をするだろうしな」
「勝手に私の価値を上げるような事は言わないでちょうだい。それより――」
「しかし。よくここに住むことを決めたな東。女子と一緒なんて、断ると思ったぜ」
「余だって、女の子と一緒なんて駄目なのはわかるよ。けど、先生とか他の皆に部屋を変えるように言っても聞いてくれないんだよ。『いいじゃんいいじゃん、若い内は体裁が大変だ』って言うだけで」
「そう言えば、一回ここに顔を出してから暫く居なくなったけど、そんな事してたの？ドイツもコイツも面白が――不真面目だから聞くわけないでしょ。それより――」
「そう言えば、ポークゥさんに真面目って言われたけど、余って真面目かな？」

「おう、真面目だ真面目。俺とか梅組の連中とかとは比べ物にならないぐらい真面目だ。真面目っつーか、染まってない。っていうのが正しいような気もするが」
「染まってないって、何に？」
「多分、梅組の色だな。いや、武蔵の色か？」
「待ちなさい。その言い方だと、私もキチガイってことになるじゃない。だからもっと正確に説明しないと」
「正確な説明って？」
「染まってないじゃなくて、病気じゃない。が正しいわね」
「病気とはまた凄いな。どんな病気よ？」
「空気感染する病気ね。病原体はきっと生徒会長兼総長よ。因みに感染すると常識が段々無くなって、奇妙な行動をとるようになるわ。だから、私はアイツ等とは違って常識人よ。って、そんな事より――――」
「オメーの発言もおかしいと思うのは俺だけかよ」
「えーと。それなら薬撒いたりして対処しないと」
「おぅおぅおぅ、誰だよ東の教育した奴。もう少し人を疑う事を憶えさせないと…」
「だーかーらー、それよりも！」
「「ん？」」

「何でお茶会みたいなことになってるのよ!?」
学生寮の奥にある部屋で三人の男女が車座になって座って話してる。
一人は留年（？）生、井森・覚。そして、車椅子に座ってる少女ミリアム・ポークゥと、黒い長髪の小柄な少年東だ。
ミリアムはいつも通り車椅子に。東は座布団の上に正座で。覚は座布団とか敷かずに直接床で胡坐を組んでいて、それぞれには覚が、喉が渇いた時用にまロ茶を渡してある。
「気にすんなよポークゥ。俺は気にしないぜ」
「あ。余も気にしてないよ」
「私は気にしてんのよ!?」
ミリアムが怒鳴り、つい先程の事を思い出す。
覚が急にこの寮室に入ってきたと思ったら、暇潰しに来たと言って座り込み、世間話をし始めたかと思ったら少しずつ脱線し今に至る。
「暇潰しに来た？　夜のイベントに参加するんでしょうが。こっちこないで、あっちに行きなさいよ」
「俺は準備には係わらないからな。偶にはノンビリさせろや」
「準備どころか、もう少しで始まる時間じゃない」

まロ茶を口にしながら覚が答える。
こんなところでノンビリしなくてもいいのに。と言うか、早くあっちに行けとミリアムは思うが、それ以上は何も言わない。
「それより東、荷物はそれだけか？」
東の持ってきた荷物は、ちょっとしたトランクケース一つだけ
「家具は部屋に備え付けのモンがあるだろうが、足りないモンとかは無いのか？」
「え？　あぁ、うん。大丈夫だと思うよ。服とか授業に必要な道具だけだし。もし足らなかったら後で買いに行くよ」
「それだけなら人でも必要ないな」
「何、覚さん？　入寮の手伝いでもするつもりだったの？」
ミリアムが問いかけると、覚は力こぶを作りながら軽い返答が返ってくる。
「重いモンがあったら、どう考えても人手が足りないだろ。パワー的に」
「あ。有難う井森。さっきも言ったけど余なら大丈夫だよ」
「あぁ、だな。これがクロスユナイトとかだと、忍具だけじゃなく大量に本を持ち込んだりするからな」
本も嵩張ると重くなるからなぁ、と覚が零すが、東は点蔵が本を大量に所持している話に意外な面があるんだなと思った。

逆にミリアムは、ソッチ系の本に決まってると判断し、もし、万が一、可能性はゼロに近い筈だが、部屋が一緒になる事があったら、東と違って必ず○○と思った。
「まぁ、あのヘタレ忍者だったら手伝う気なんかこれっぽっちも起きないだろうな。っと、それより東、葵（弟）の企画にお前は参加するんだろ？　ボチボチ行くか。ポークゥは――――」
「私は参加しないわよ」
「え、そうなの？」
東は一緒に行くつもりだったのか、驚いた顔をミリアムに向ける。
「どうせロクな事にはならないでしょうから、二人で逝ってきなさい」
「…今、行くって字面がおかしかった気がするな」
「分かったよ。あ、そうだ。戻って来る時に、何か食べ物とか持ってこようか？　余が買ってくるよ」
「気をつかわないでいいわよ。戻って来るのは結構遅くなってるでしょ？　夜遅くに食べると、余計なお肉がつくしね」
「余計な肉ねぇ……」
ミリアムの発言に、覚がミリアムの顔より下に視線を向けて考える。
「少しは余計な肉をつけたほうが良いんじゃねぇか？　特に胸部装甲薄いわ――――バ

フッ!?」
「い、井森!?」
「いいから早く行け!!」
覚の顔面にミリアムの投げた辞書が直撃していた。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「はっはっは。楽しそうだなアイツ等」
「楽しそうでも。あんなに教導院が揺れると、ポークゥさんが怒りそうなんだけど。余は係わってないのに怒られるのは嫌だよ」
俺と東が他の連中に遅れて肝試しのイベント会場の校庭にきたと思ったら、少し前から教導院から轟音が響いてきやがる。
教導院の中で何があったのか知らないが、疲れ切った連中が周囲に散っているが、
「まだ中に何人か居そうだな。どんな塩梅だ浅間?」
芝生に仰向けで倒れて動かない息切れ起こしている浅間に声をかけてみた。呼吸に合わせて動くオパーイはエロいな。
「わ、分かりま、せんっ。そ、それより、回復するまで、待って、下さいっ」

本当に苦しそうだな。今はバルフェットに扇がれて、向井に汗を拭かれてやがる。
「あ、あの、水を、浅間さ、ん…、息、切れ、切れててっ」
「おうおうおう、見りゃ分かるって。ほれ、向井これやるよ」
向井にまロ茶を手渡す。まだまだ大量に残ってるからどんどん消費してくれ。
「あ、有難、う、井森さん。ところで、中身、は…、何？」
「ん？　ただの茶だ。毒とか入れてないから安心しろ」
「今の発言だと、逆に不安になりますよ覚さん」
バルフェットが突っ込んでくるけど、そんなもんかねぇ。
「取り敢えず、馬鹿共を肴にして飲むか。東とかもど「一体何の騒ぎだこれはあーーー!!」う――って、何だ？」
割とすぐ近くで大声が響いてきたけど、誰だ一体――――って、あの目立つ格好はヨシナオの王様か。
「全くけしからん！　誰だこんなことを始めたのは!!　出てき賜え!!」
うん。一応、この武蔵野王様だからな。言ってることは正論だな。――――――って、拙い！
「――――ひ、あ、あっ」
王様のすぐ傍に向井がいやがる。目が見えない向井に突然の大声は無防備に殴られ

たのと変わらねぇから、
「――？　どうしたのかね。言いたいことがあるなら言ってみ賜え、さあ！」
「うわあーーーーーん!!」
　あぁ、やっぱり泣いたか。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

　鈴が泣いた。
　周囲にいる皆が引き、ヨシナオが慌てて声をかけるが、
「こ、こら君、い、一体――」
「この、こ、この、おじ、ちゃん、き、嫌いーーー!!」
　すげえ鈴さん、超正論だ。と皆が頷いた。
「オイオイオイ王様、向井泣かすなよ。皆にも嫌われるぞ。――更に」
「更に!?　待て、麻呂は嫌われてなんかいないぞ!!　それより、君らはこんな騒ぎををしておいて――」
「ひあーーーん!!」
　ヨシナオが覚の発言に声を張り上げると、鈴の鳴き声が更に響く。流石に皆も慌て

て、だが、その中でも東が手を振り注目を集めると、
「ええと。誰かこういう時、どうすればいいのか――」
東の提案にハッサンが頷き、カレーが入った魔法瓶に懐から出した白い粉を入れシェイク。そしてそれを鈴のほうに向ける。
「さ、カレーを飲めば哀しい心も落ち着くネー」
「おあ、お前、今何入れたんさね!!」
直政の問いかけにハッサンは無表情に頷くと、
「スパイスですネー」
「違うだろ！　どう見ても薬だったさ今の！」
「違いますネー。カレーは多様なスパイスで出来てますネー。だからカレーに入るのはスパイスですネー。理論的ですネー」
「どこが理論的さね！　ああもう、ちょっと貸しな、――――――フンッ」
「ん？　どうし――――フガッ!?」
直政がハッサンの魔法瓶を奪うと、覚の口に押し込み強引に飲ます。いつの間にか周囲の注目を集めている中、ぐびぐび、と喉が動き中身を全て飲み干すと、
「ん、ん、ん、っぷは！　あー、ごちそうさん」
「井森…、大丈夫さね？」

平気そうな覚の様子に、直政はアレ？　と思ったが、死者を出さないように頑丈な馬鹿に飲ませたのが、そもそも失敗だったかと考え直した。
「急に突っ込むなよ。それよりフルブシ、これ――――――」
「――――、井森？」
突然喋るのをやめ動かなくなる覚。
そのまま暫く固まってると急に大きく震えだす。
「か、覚さん!?」
「ちょ、井森？　こらっ、やっぱり薬だったさね!!」
直政がハッサンに改めて詰め寄るが、
「大丈夫ですネー。井森さんはカレーのおいしさに感動して震えているだけですネー」
「そんなわけあるかい!!」
ハッサンの表情は変わらず、覚の震えは段々と大きくなっていく。
「お前、こんな危ないモンを鈴に飲ませようとしたんさね！　他の馬鹿達と違って鈴「――――お」は――――、って、井森!?」
覚の声が聞こえたのでそちらに振り向く。すると覚の震えは止まっていた。
が、表情がいつもと違っていた。いつもは眠たそうな顔だったが、今は目を見開き口を横一文字に結んでいる。

そして直立不動の姿勢をとると、
「――――オ○レ兄さーーーーーーーーーーーーーーーーん!!」
「「「「「「誰それ!?」」」」」」
訳の分からない発言をすると、そのまま前に倒れ込んだ。
「か、覚さんが死んだーーー!!」
「死者蘇生にもカレーは使えますネー」
「いや、勝手に殺すなよ」
「そうだな…、本当に死んでないよな?」
混沌化の進む中でヨシナオが改めて声をあげるが、
「それより、君らはさっきから麻呂の話を――――」
「うわあーーーーーん!!」
と鈴の声が響き、しかし、次の瞬間。
「――――」
不意に鈴がその鳴き声を止めた。
え?　と誰もが視線を向ける中、鈴が開いていた口を穏やかに閉じた。
代わりというように、彼女は顔を前に向け、両の耳に手をあてる。そして、
「え……?」

皆が思っている疑問視を彼女も作った。
鈴は頬の涙を拭いもせずに、左右に耳を傾けた。ややあってから、
「――――あ、あっち」
と三河のほうを見た。
現在、武蔵が停泊している場所からは山渓しか見えず、夜の明かりの無い状況もあって黒い塊しか視界には入ってこない。
山さえなければ三河の町の明かりが見えただろうが、町の光など無い闇だけがそこにあった。
だが、不意にその闇が壊れた。
発火の光、炎だ。
山渓の、峰の上に、焔（ほのお）の形が生まれた。
「あれ……」
鈴が言うと同時に、遠雷に似た音が聞こえた。
「爆発じゃないかね」
直政が、聞こえた音からつぶやいた。
応じるように、校舎の窓から顔を出していたネシンバラが、
「あのあたり……、三河を監視する聖連の番屋の内、一番高いのがある筈だよ。何だろ

う、事故かな。火災とかの」
　遠くに見える炎が大きくなるにつれ、どうした、とか、何だ、とか、皆の間から小さな声が生まれ始める。
「おーし、続きは今度だ!!」
　校舎にいただろうトーリが終わりを告げながら昇降口から歩いてくる。
　その言葉に皆は頷き、立ち上がり、歩き出し、動き出す。
　周りにいた観客等も去っていく中、訓練用の騎槍を抱きながらアデーレが、
「何なんですかね、あの炎」
　と、皆の疑問を口にする。
「三河の商工会と連絡がとれん。自動人形が居ない筈無いんだが」
「今見ていても、三河の方、灯りが増えないの。――――町が動いてないのかな。それと…」
　校舎から出てきたシロジロとハイディが今確認が出来ている事を伝え、
「覚さんもそろそろ起こしたほうが良いんじゃないかな」
　今も倒れている大男を見て言った。
「確かにな。タダ働きする人間は多いほうが良い」
「けど、これって起きますかね？」

「誰でもいいから早く起こせ。――――――これから少し、忙しくなる」

【配点】親と子と

「ん、ん、ん、何か首回りがおかしいな」
「き、気のせいさね」
起きたら、なんか周りが慌ただしい。つーか、いつ俺は寝たんだ？　首に強引に曲げられたような違和感あるぞ。周りにいる連中は死体が起き上がったような目でこっちを見てるし、葵（姉）はケタケタ笑って、直政は何か持ってる巨大レンチと俺を見比べてるし。
まぁ、いい。それより現状の確認が先だな。
「あー、よく分からねぇが、まぁ、いいか。ベルトーニ、何があった？」
「情報が欲しいなら、出すものだせ」
「それぐらいサービスしろ。次の機会の為にな」
「ふん。貴様には色々稼がせてもらった事もあったな。いいだろう」
俺の前に表示枠が展開される。
えーと何々。三河と連絡が全く取れなくて、何か異変が起きてるかもしれないと。向井も変な音を聞き取ってるのか…。

「成程なぁ。……稼ぎ時じゃね商人」
「全くもってその通りだ。ハイディ、各国の極東居留地との通神をすぐに開けるようにしてくれ。武蔵商人団の他の連中をだしぬく」
「Ｊｕｄ．はは、後で睨まれると思うけど毎度の事かな」
毎度と言うか、チャンスを掻っ攫われた商人は基本そうだろ。
「…では、皆、今日は解さ――――――」
「ま、待っ、て…」
ん？　どうした向井。皆を停めて？　つーか、右手伸ばしてどこを指さし――――
「あ、あれ……、その、」

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「――――余？」
鈴に差された東は首を傾げる。
何があったのだろうか。鈴が気付くのは音だ。だから何かあったとしたら、
「ええと」
自身の状態を確認するが特に変なところは見当たらず、

「――――」

だが、周りの皆はこちらを見ている。

しかし東は首を傾げ、改めて見ても、やはりない。――――が、

「余！　そうじゃなくて！　後ろ！　後ろ!!」

「後ろ？」

言われ、問い返し後ろに視線を向けると、まず一つのものを見た。

少女がいた。白く髪を乱した、白い肌の女の子だ。

顔は泣き出しそうで、

「――――」

「透けてる……？」

身長一メートルに満たない子供の身体は、半ば透けていた。地面も、芝も、わずかな揺らめきとともに透けて見える。

その事実に皆が息を詰めたとき、少女が口を開いた。

「パパがいないの……」

そしてうつむき、

「ママ、見つからないの……」

それを見て皆が声を上げようと息を吸い込み、

「「「「出――――「――――またまたまた、珍しいのが出てきたな」――――たーーあぁ？」」」」

覚が進む姿に叫び声が疑問に変わった。

そのまま東の、少女の前まで移動すると胡坐を組んで地面に座り込む。少女の視線の高さに顔を合わせと、怖いのか泣きそうになり、東の後ろに隠れようとするが、

「さて――――、パパとママを探してるのか？」

覚の声で動きが止まり、じーっと視線を前に向ける。

「んー。千里、リスト」

『ニャー』

「あっ」

表示枠から覚の走狗が出て来て頭に座り込み、眼前に何かの一覧表を表示する。

少女は急に出てきた猫に興味があるのか、目を大きく開き覚の頭の上をじーっと見ている。

「あー、どれにするか。おーい、浅間」

「はっ、はいっ」

「この嬢ちゃんは何だ？」

周りにいる連中のなかで管轄だろう巫女職に、幽霊としか思えない少女の存在を改めて確認しようとする。

「えーっと、取り敢えず見たまま幽霊としか今のところは言えません。今回の肝試し用にわざわざ呼んだものとは違う筈ですし、最近怪異が多発してましたから」
恐らくそっちの関係だろうと口にする。
「ふーん。じゃあ、構ったりすると呪われたりするか？」
「Ｊｕｄ．見た感じ大丈夫かと。見たままの年の時に亡くなった残留思念が質量、流体を持っただけで直接的な害は無いと思います」
「よしよしよし。ところで、神社の娘としては祓うのか？」
覚がそんなことを言うと、非難するような視線が集中する。
「あんな小さな子を消すのか・・・」
「酷いことをするのだな」
「害は無いんだろ？　だったら別にいいんじゃないか？」
「小生思いますに、こちらで保護をしなければならないかと!!」
「え、ええ、ええぇ!?　まだ何もしてないのに一気に責められてますよ!?　あ。あと、若干一名はまだ生きてますが、ここで祓ったほうがいいかと」
「御広敷には半径十メートルぐらい近づけさせないとして…、よし、コレでいいか」
見ていたリストから顔を離すと、覚はリストの一箇所を押す。すると、小さな、手のひらよりも小さな綿あめが出てきた。

「さて嬢ちゃん」
「っつ!?」
走狗を見ることに集中していたからか、少女は声をかけられたことに驚き体を震わせる。
「ほれ、コレ。甘いぞ。ちょっと舐めてみ?」
そんなことを言って綿あめを渡そうとする。
幽霊な少女はそれを見るが中々動かず、綿あめと覚を交互に見続ける。
「か、覚殿?　幽霊はものを食べれないと思うで御座るが…」
「あーＪｕｄ．これ、一応走狗用の奴だから。この嬢ちゃんも大丈夫だろ。浅間のハナミとかにもしょっちゅう食べさせてるし」
「ええっ！　ちょっとハナミ!?」
覚の発言に驚き、自分の走狗を問い詰めると必死にそっぽを向いて視線を合わせようとしない。
「大丈夫だぞ。ほれ、食べな」
「……ん。――――ん♪」
漸く受け取り、舐めると、気に入ったのか泣き顔から笑い顔になる。
それを確認してから、覚はさっきから動きが止まっている東に、

「取り敢えず、東」
「な、何？」
「お前、この子のパパな。部屋に連れて帰れ」
「――――――――ええええっ!?」
急な発言に東は驚く。当然だろう。いきなり娘が出来て、しかも自分とは種族すら違うのだから。
だから、覚と同じように座り込むと、猛反発する。
「な、何で!? 余は、子育てとかしたことないよ！」
「俺だってしたことねぇよ。いいじゃねぇか。懐かれてるし」
綿あめを食べてる少女の片手は、東のズボンを掴んでいる。東が座った時は離したが、今はまた掴んでいた。
「それにちょうどイイじゃねぇか」
「何が？」
「ポークゥへのお土産」
「その子をお土産にしたら、余がポークゥさんに怒られるよ!?」
東の頭の中には、白い目で見てきて、車椅子で軽めだが何度も体当たりしてくるミリアムの姿がよぎっている。

周りを見渡そうとすると、誰も視線を合わせようとしない。
この窮地（?）を何とか出来るのは自分だけだ。と決意し、辞退しようとするが、
「いいか?その嬢ちゃんの台詞からパパとママ、男と女の両方が必要なのはわかるだろ?」
「え?　あ、う、うん」
「東の処はその条件に合っている。それに、見たまんま小さいから、馬鹿共に係わらせると速攻で染まる」
梅組、と言うか武蔵で真面で信用出来る人間など、片手の指で足りる程度しかいないと覚は思っている。つーか、それぐらいは居て欲しい。
「更に言えば、ポークゥは自室で勉強が基本スタイルだから、その子を見る時間は他の奴らよりある筈」
「……確かにそうかも」
「このまま放置する訳にもいかないだろ、目覚め悪くなりそうだし。取り敢えず頼む。暫定処置と思ってくれ」
「暫定処置……。うん、それなら」
頭を下げた覚に、東は一時的に預かるだけならと納得する。因みに、この時、東から見えなかったが覚の顔は、実にイイ顔だったと言っておこう。

「じゃあ、この後で連れてくよ」
「Ｊｕｄ．助かるぜ。納得したところでその嬢ちゃんはお前らの養女と言うことで頼んだ。それと、その子の情操教育も関係してるが、ポークゥの事は名前で呼んでやれ。勿論、本人の許可をとってからな」
　まだ綿あめを食べてる少女への対応がここに決まった。
　暫定と言う話だが、周りの連中は絶対に違うと思っている。
「なぁ、アレは…」
「あぁ。絶対そのままにするぞ」
「ナイちゃん、後から問い詰められても、適当にごまかすと思うな」
「まぁ、いいんじゃない。ドンドンネタを出してくれそうだし」
「自分は良い選択だと思うで御座るよ。真面目な二人が幼女を養女にすると言うのは」
「ハイ！　今、負け犬忍者が何かボケたみたいだけど、無視でいいわよ無視で！　むしろ拷問!?」
　今のはわざとじゃないで御座る等と段々と騒ぎ出し始めてる中、いきなり光が来た。
「!?」
　皆が光が来たほう、三河側に振り向くと、大地が光を強くしていた。
「…なんだアレ」

誰かが皆の疑問を口にするが、それに誰も答えなかった。
音が来たのだ。三河の裂ける轟音が、一息にありとあらゆるものを震動させた。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

『どうだい地脈炉暴走、さあ、三河の消滅を見てみたい人は元気良く手を挙げなさい。……はーーーい!!　ぼぉく見たいでーーーす!』
「――――何馬鹿言ってんだ、あのおっさん」
三河で起きた爆発とかの原因を調べようとしてたら、全国の各地に表示枠が現れておっさんが何か言い出しやがった。
「あの覚さん。あの人って、三河・松平家当主、元信ですよね」
「そうだなバルフェット。頭のネジが緩んでそうだけどな」
「…それって、結構失礼な発言になるんじゃ」
「いやいやいや。今の発言じゃ、そうとしか評価出来ないだろ」
近づいてきたバルフェットが注意してくるけど、少なくとも俺はそう思うぞ。つーか、さっきからイイ空気吸ってるせいか、どんどん今の状況の説明を続けてるけど。
えーと、三河の異常の原因は、自身で起こした新名古屋城の地脈炉の暴走で、その結

果は三河の大地の消滅と。
「あー、アレだな。バルフェット、さっきの発言訂正するわ。ネジが緩んでるんじゃなくて、一本も残ってない。が正しいな」
「よ、余計にひどくなりましたね。って、それより何とかしないと!?」
「何とかって、どうするんだ?」
今から三河に行くのは厳しいだろうし、武蔵の監視、三河との打ち合わせの為に来ていた三征西班牙（トレス・エスパニア）は、阻止しようと武神を始めとした戦力を投入したみたいだけど、三河にいる自動人形の妨害を受けて、遅々として進まない。
そして、地脈炉の暴走阻止限界まで残り五分を切ったと。どう考えてもお手上げだな。
「おい、ベルトーニ」
「…何だ?」
「確か…、三河からこっちへの発注は無いとか言ってたな」
「…Ｊｕｄ．受注分だけだったから、倉庫の確保に手間が掛かった」
その上、三河には殆ど自動人形しかいなかったな。と言うことは、今回の事は事故とかじゃなくて、計画されていたってことか。
――――って、歌が聞こえるな。

「今、流れているのは…」
「あぁ、通し道歌だ…」
「自動人形によるコーラスか。ってか、何で歌ってんだ？」
歌が終わっても、伴奏状態は続いてるし。
『ハイいいですかあ!?　この歌、これから末世を掛けた全てのテストに出ます（配点：世界の命運）』
だから通し道歌を流したのか。つーか末世？　あぁ、さっきからわけわからん。
『じゃあ皆さん。先生に何か質問はありますかー？』
『元信公……！』
ん？　誰だアレ。別の表紙枠に出てるけど。つーか、変なオッサンと戦おうとしてないかあの兄ちゃん。
『――一体、何のために、地脈の暴走と三河の消滅を行い、極東を危機に陥れるのです!?』
『三征西班牙（トレス・エスパニア）、アルカラ・デ・エナレスの宗茂君。質問のときには手を挙げましょう』
あの兄ちゃん、八大竜王の立花・宗茂か。ってことは、手に持てるのは大罪武装（ロイズモイ・オブロ）か。で、対峙してるおっさんは――誰だ？わかんねぇ。
『では宗茂君、いい質問だったので、先生は逆に一つ問います。危機って面白いよね？』

「馬鹿じゃねぇのか？　って、馬鹿だな」
「さっきから辛口評価ですね覚さん!?」
危機が面白いって言ってんだぞ。馬鹿としか思えねぇよ。
さっきからオッサンと立花某が激しく末世がどうとか問答を繰り返してるけど、やっぱ平和が一番だと俺は思うが。つーか、末世と三河消滅は何の関係があるんだ？　時間が無いんだから、話してないで動けばいいんじゃね？
『だからこう言おう。いいですか皆さん、大罪武装を全て手に入れたならば――その者は、末世を左右できる力を手に入れる』
更に爆弾発言が出たな。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「訳の分からないことを！」
立花・宗茂は叫ぶ。
「大罪武装を各国に配ったのは貴方ではないですか!?　それを、末世の解決の為に大罪武装を手に入れろとは……、八つの大罪武装を巡って戦争を起こせと言うんですか!?」
『おやおや宗茂君、それはちょっと間違ってるなぁ』

「…間違い？」

松平元信の発言に宗茂は疑問を抱く。

『そもそも大罪武装は、七つの大罪を基礎とした、八つの想念を模した神格武装で先生の自慢の作品だけども――――』

「それは知ってます。八つの想念、〝強欲〟〝傲慢〟〝淫蕩〟〝嫌気〟〝暴食〟〝虚栄〟〝憤怒〟そして私の持っている悲嘆の怠惰の原型たる〝悲嘆〟です」

そう八つの想念を基にした大罪武装は現在六の国に分配されているが、

『駄目だなぁ宗茂君、まだ先生の説明は終わってないよ。さて今あがった八つの想念だけど、これにも原盤があって――――九大罪だったらどうする』

製作者が更なる大罪武装があると暴露した。

●

「元信！まさか貴様――!!」

今の放送を聞いていた、Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａ教皇総長インノケティウスは歯をむき出しにして叫ぶ。

当然だろう。今、自身が三河に来ているのは大罪武装の追加発注も兼ねて来ていたの

だ。それなのに、もう物は出来ていると言う。
『八つの想念が七つの大罪になった時、想念は八つから六つにまとまり、そこに一つの大罪が新たに加わった訳だけど』
「その加わった大罪〝嫉妬〟が九つ目の大罪武装の原型と言うわけか！」
インノケティウスの発言に満足そうに元信が頷く。それに怒りを覚えながらもインノケティウスは考える。物は既に出来上がっている。だとしたら、出来上がった物は今どこにある？
『それはそうと、皆は大罪武装に纏わる噂は知ってるかな？』
「噂？」
『そう噂。大罪武装は人間を材料としているから、人間の原罪をモチーフにした能力を使用できるって内容だけど――それは本当だよ』
噂が本当だと聞き、インノケティウスは自身が所持している大罪武装に視線を向ける。話を聞いていた他の所持者も同じ事をしただろう。
『噂通り、人間の感情を部品にしてるんだけど、その部品にした人間の名前はホライゾン・アリアダストという』
どこかで聞いた名前だ。
『十年前に私が事故に遭わせ、大罪武装とした子の名前だ。そして去年、彼女の魂を大罪

武装にし、自動人形の身体を与えて武蔵に送った』
　松平元信の話は止まらない。
『Ｐ―０１ｓという名前を持って武蔵で生活をしている。自動人形Ｐ―０１ｓ、その子の魂そのものが、――――〝嫉妬〟の大罪武装〝全域焦がれ（オロス・フトーノス）〟そのものだ』

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「Ｐ―０１ｓ…ねぇ」
　どっかで聞いた名前だな。今一思い出せないが。だけど、ホライゾンの名前は分かるぞ。今日何回か聞いてるしな。それより葵（弟）は大丈夫かねぇ。
『今日、ホライゾンを見たよ。……手を振ってくれていた』
　さっきから微動だにしてないけど、当然か。自分の惚れてた子の話だもんな。
『ホライゾンは元気なようで、……何よりだ』
「――――って、葵（弟）!?」
「――――愚弟!?」
　あいつ一気に走り出しやがった。どこに向かう気だ？　って決まってるか。
「愚弟！　アンタどこ行くの!?」

葵（姉）が声をかけても止まろうとしないな。仕方ないか。
「おい、何人か付いて行ってやれ。一人にすると拙いだろ」
俺が声をかけて走り出したのは…、ネシンバラとノリキとウルキアガか。
「追って！　お願い…！」
「取り敢えず落ち着け葵（姉）。おい浅間、ちとコイツのこと頼むわ」
「わ、わかりました。ほら喜美」
よし葵の姉弟はこれでいいとして。後は、
「なぁ、ベルトーニ」
「なんだ井森・覚」
「葵（弟）が走り出したってことは、ホライゾン――――Ｐ―０１ｓの事を知ってると思うんだが、お前は知ってるか？」
「シロ君も私も知ってるよ」
ん？　オーゲザヴァラーか。
「覚さんも見たことあるよ。ほら青雷亭の」
「葵姉弟とこの店番か」
成程。確かに何度も見てるし、話したこともあるな。あの自動人形がＰ―０１ｓか。
つーか、葵（弟）が告ろうとしてる相手は自動人形だけど、実際は死んだはずのホラ

イゾンだったと。
「三河が消滅するだけで面倒だってのに、ホライゾンの事もあるのか。だるいな」
「だ、だるいって。それはどうかと思うけど…」
　明日とか滅茶苦茶大変になるのがわかるからだるいんだが。まぁ、それより、
『君ら次第で、大罪武装を巡って大戦が起きるかもしれないね。けど、見たいよなぁ――――史上初の聖譜記述にも無い世界大戦を！』
『止めます!!』
『いい答えだ宗茂君！　よく考えて動くのは素晴らしい時間の使い方だ。だけど先生の授業を邪魔するのはいただけないなぁ。だから――――「おーい、ソッチの話はもう終わりかー」――――おや？』
　俺も聞きたいことがあるんだ。だから、
「終わったのなら松平の先生よぅ。俺も質問があるんだけど答えてもらえるか？」

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

『ふむ…、質問を聞く前に名前を教えてくれるかい』
　手を挙げている覚にそんな言葉が返ってきた。それに対し、

「Ｊｕｄ．武蔵アリアダスト教導院、三年梅組所属、井森・覚だ」
自身の所属も含め返答する。
『へぇ、井森・覚君か…。成程成程。〝異守〟の家の子か。それで先生への質問は何だい？』
若干変な言葉が混じってが返ってきた。が、それに気にすることなく、覚は周りにいる他のクラスメイトやこの放送を聞いている人達の視線を集めながら、改めて質問をする。
「松平の先生に聞きたいのはアレだ。今の話の中にホライゾン・アリアダストを事故に遭わせて大罪武装の部品にしたって言ってたが、――――部品にするために実の子を事故に遭わせたのか、実の子が事故に遭ってしまったから部品にしたのか。…どっちよ？」
過程と結果、どっちが先かを覚は問うた。
『おや？　質問はそれでいいのかい？　宗茂君みたいに三河の消滅を止めるにはー、とかじゃないのかい』
「そんな事はどうでもいい」
覚は三河消滅なんか本当にどうでもいいと思っている。だから切り捨てた覚に様々な感情が向いても気にしない。それよりも問いかけた質問のほうが覚には大事なことだ。

「それより先生、質問の答えはどうよ？」
『うん、そうだねぇ』
　表示枠の中で腕を組む松平元信。少し考えると、
『何でそんな事が聞きたいんだい？』
「質問に質問で返すなよ。先生だろ」
『はっはっは、それもそうだ。けど先生も知りたいなぁ』
　笑いながら、だけど目は真剣な色を見せながら元信は覚に聞いてくる。それに対して、
「簡単な話だ。事故に遭ったから部品にって話なら自分の子供も救えない馬鹿野郎って見下して、部品にするために事故を起こしたのなら人として救いようがないクズ野郎って見下すだけの、どっちを基準に考えるかを判断するために質問したんだが――――」
　一体どっちだ――――覚は最後まで言わずに問うてくる。
　この時、覚の周りにいた梅組の皆は驚いていた。普段の覚は、眠そうにしているか、笑っているかの表情ばかりで、恐らく初めて見る真面目な、体育の戦闘関係の授業でもしていない真剣な顔だったから。
『それはそれは…、どっちも酷評だねぇ』
「そうか？　前者のほうがまだ救いがあるだろ。それよりどっちだよ。答えプリーズ」

『そうだねぇ。わざと事故を起こしたことにしようか』
「それだと質問に対する答えになってないだろ」
『そうだね。けど、三河が消滅して僕も死ぬから、どっちでもよくないかい？』
『消滅などさせません!!』
　急に別な声が聞こえてきた。誰だ、と確認すると、それは立花・宗茂だった。
『ここで地脈炉を破壊し、地脈炉暴走を止め、貴方達を皆の前に連れていく！』
『人が話してる最中に割り込んでくるのはいけないなぁ。ちょっとそこの副長、なんとかしなさい』
『我がなんとかするのかよ』
　宗茂と対峙していた年輩の男は、そんな事を口にしながら手に持った槍を宗茂に向けた。

●

「やれやれ。最近の若い子は礼儀がなってないね。それより覚君」
『なんだ松平の先生』
　元信は改めて覚に質問する。

「さっきの質問なんだけど、どういった意図で聞いてきたのかな？　是非、先生に教えてほしいなぁ」

三河が消滅する前に、最後にちょっと聞きたい事が出来たから。

『ん、ん、ん、まぁ、いいけど。俺個人の考え方が原因なんだけど、――――子供を犠牲にしなくちゃ存続出来ない世界なんて、滅んだほうがよくね？』

「それはそれは…、また、随分過激な発言だね」

この放送を聞いている人達の記憶に刻まれかねない事を言ってくるなと元信は思った。

自身の子に手を出した元信もそうだが、末世を何とかするために足掻いている他の国の首脳部も敵に回しかねない発言が返ってきた。だけど、

『そんなに過激か？　単純に親子仲良くやりましょう。ってことを辛口に表現しただけだろ』

「辛口というより激辛だと先生は思うなぁ」

元信はこの子は実に優しい子だと思った。恐らく自分の親に大事にされていたのだろう。こういう子にこそ、

「君には〝創生〟を叶える側にいてほしいなぁ」

【閑話】　気まずい

「えー、では、クロスユナイトがまたも無残に告白を失敗しました酒が美味い会を始めます」

「会の名前が酷いで御座るな覚殿!?」

酷いって言っても、なぁ。

「何言ってんだよテンゾー。懲りずに告白して、また失敗したからからか慰めようとしてるだけじゃねーか」

「ちょっとトーリ殿、今からかうって言おうとしてなかったで御座らんか?」

「そんな事より、早く始めないか?もう目の前の肉がいい感じに焼かれて、拙僧としては我慢の限界に近いのだが」

今日も今日とて、告白に失敗したクロスユナイトで楽しむ為に焼き肉屋で騒ぐのが今回の主旨だからな。

「半竜の言う通りだな。それじゃあ皆、グラスを持って……、クロスユナイトがまた告白を失敗する事を祈って「ちょっ、覚殿!?」カンパーイ!」

「「カンパーイ!」」

「二人共、当たり前のように続いたで御座るな!?　あ、カンパーイ」
あぁ、ビールが美味い！
「む。この肉、美味いな。結構質の良い肉か？」
「お、本当かよ？　どれどれ」
「こらトーリ、拙僧の前から取るな！　自分の前のを食べろ！」
「ウホー、美味ぇ！　なにトカゲ兄い、ここって結構良いトコ？」
「少し前に開店してな。肉の脂がいい感じだから、こうやって肉を食べてビールで流し込むと――――――、かぁー、たまんねえ！」
「実に美味そうに飲むで御座るなぁ。それより、確かにこの店の肉は美味いで御座るな」
「だろ？　他の連中に教えてもいいけど、あまり騒ぐなよ」
この店出禁になったらダメージでかいからな。
「そう言えばトカゲ兄ぃ。何で俺達四人だけで、他の奴らは呼ばなかったんだ？」
「Ｊｕｄ．簡単な話だ。まず、今回は全額俺持ちだ。多勢呼んだら俺の懐の寿命がマッハだ」
「普段から賭博で稼いだ金があるだろう貴様」
「で、クロスユナイトが振られた事が原因だから、女は呼ばないほうがいいだろ」

「原因って、その言い方はどうかと思うで御座るが」
「更に、他の男達を数人呼ぼうとすると、なんか連鎖して呼んでない連中まで来るから、今回は俺達だけな」
「そっかー。あ、トカゲ兄ぃ、その肉焼けてる」
「あ。危ねえ」
危うく焦がすところだった。
「さて、クロスユナイト。食いながらでいいから、話せ。どんな感じに失敗したよ？　あ、店員さん、ビール大追加ー」
「そうだそうだテンゾー。どんな女の子に告ったんだ？　あ。このハラミ美味え」
「どうせ点蔵だ。いつも通りに金髪巨乳に決まってる。ふむ、この豚トロもいいな」
「いや、まぁ、確かにウッキー殿の言う通りで御座るが。あ。自分、ホルモンとか食べたいので御座るが、覚殿、頼んでも？」
ホルモンか。頼むのは別にいいが、
「どうでもいいけど、ホルモン系って、物によっては食感が貝類に似てるヤツがあるけどよ」
「急にどうした井森。拙僧はホルモンよりカルビとかが好みだ」
「あ、俺はタン！　タンって舌だろ？　だったら異種間のディープチューって事だよ

な!?　なんかエロくね?」
「どう考えたら、そうなるで御座るか。あ。自分、ミノとかセンマイとがいいで御座るよ」
「クロスユナイトはまた歳に似合わない好みだな。で、今クロスユナイトが挙げたヤツなんかは本当に貝類みたいな食感なんだけどよ」
「おい井森、勿体振らずに早く話せ」
「その貝類なんだが、――――――貝類好きな奴らは普通の奴らよりエロいんだと」
あ。やっぱり二人の視線がクロスユナイトに向いたな。
「そっかテンゾー。お前、やっぱりエロかったのか」
「所詮点蔵だしな。今回振られたのもエロいのが原因だろう」
「自分がエロいとかは、二人だけには言われたくないで御座るよ!?　特にトーリ殿!」
「落ち着けよクロスユナイト。あ、その肉焦げるぞ」
「おっと、かたじけないで御座る。って、エロい云々は貝類の話で御座ろう!　肉の好みでその話はお門違いで御座らんか!?」
ま、確かに肉と貝類は違うな。じゃあ、
「なら、寿司ネタは何が好きよ?俺ハマチ。脂の乗り具合が堪らん」
「拙僧は穴子だな」

「俺はそーだな、イクラ！　キレーだよなアレ」
「自分は赤貝などが好みで御座るな」
「「やっぱり」」
「何がやっぱりで御座るか!?」
貝類以外の名前を挙げればいいのに。時々ワザとだと思うぞ。
「ま、クロスユナイトがエロいのはどうでもいい「よくないで御座るよ!?」から、取り敢えず、ホレ、どんな女に告ったよ」
「脱線させたのは覚殿で御座るのに。あー、今回は自分より二つ上の女性で御座るが――」
「点蔵貴様ー!?　拙僧の領域に手を出しおったのか!!」
おい。急に立ち上がるな、ビールが零れる。
「落ち着け半竜、拷問にかけるのは後にしろ」
「つく、仕方がない…。まぁ、異端審問にかけるまでもないしな」
「その前に、自分が拷問に遭うのは決定で御座るか!?　しかも速攻!?」
「それはクロスユナイト次第だろ。ほれ、続き」
「あー、えっとＪｕｄ．一応、自分が一年の時に三年だった先輩で御座ったのが、つい先日バイト先で出くわしたで御座るよ」

お。出会いは意外と普通だな。
「それで、当時は少し接点があって多少仲良くしてたものの、特に告白することもなく向こうは卒業してったで御座るが…」
「あれ？　テンゾー、なんでその時に告らなかったんだ？」
「それは簡単な話で御座るよトーリ殿。当時は……巨乳では御座らんかった」
…だから、いつも振られんだろうな。
「ほー。じゃあ、久しぶりに会った時は、オパーイは大きくなってたのか!?」
「まさにその通りで御座る！　二年前までは自分の見立てではギリギリでCに届かないぐらいだったで御座るが、久しぶりに会った時はなんとFにまで巨大化していて、まさにタケノコもびっくりな成長具合で御座るよ!!」
あ。それは普通に凄いな。
「ふむ…。拙僧らの二つ上だったな。その年頃だと言うのに成長したのか？成長しきった後にそこまで大きくなるのか？　あ。肉が無くなりそうだな」
「わかんねぇな。なんかの術式とかじゃないか？　葵（弟）、今度浅間辺りに聞いといてくれ」
「おうよ！　けど、それだと浅間も術式で大きくしてたとか？　つまり偽乳？　うわー、騙されたー!?」

「馬鹿な妄想から話を戻すとして、成長後に大きくなる女体の神秘具合は自分には分からんで御座るが、胸見て驚いて、顔を見てみたら先輩だと気付いたで御座るよ」
「先に顔を見ろよ。それで、乳見て、腰回り見て、尻見て、再び顔。確認する順番はこれだろ。店員さーん、このモンモンセットとか言う盛り合わせ追加でー」
「へぇ～、そーなのか。けどトカゲ兄い、なんでその順番なんだ？」
「あん？　決まってるだろ。それが真の男だからだ」
「全く理由になってないけど、スンゲー格好いいな！」
理由になってない？　川○作品の常識だろ。
「で？久しぶりに会ってどうしたよ？」
「自分の事を覚えているか確認したところ、忘れずにいてくれたで御座るよ」
「テンゾーって、全然忍ばないからなー。あ。トカゲ兄い、盛り合わせきたけど、米も頼んで良い？」
「悪い意味で、忘れられないのだろう。なら拙僧も」
「二人には負けるで御座るよ。自分も欲しいで御座るな」
「おう、頼め頼め」
「ところで、牛○のカルビ専用ごはんって、普通に頼むぐらい美味くね？」
リアルネタは辞めい。

「それで、自分の事を覚えていたので、多少はチャンスがあると思ったで御座るが、普段覚殿が言われてる『女を落とすなら焦り過ぎるのはよくないぞ。慌てる乞食は貰いが少ないって言うしな』との言葉を思い出して、その場は少し話しただけで別れたで御座るよ」

「おっ。俺が言った事を実践出来たか」

「その後も、バイト先で会う機会があればこそで御座るな。取り敢えず少しずつ仲良くなってから告白しようとしたで御座る」

「けど、結局失敗したんだよな」

「ぐはっ！た、確かにそうで御座るが、その時は今迄にない手答えを感じてたで御座ったので、そのまま進めてたで御座るよ。そうしたら、予想通り仲良くなれたで御座る」

「点蔵の話を聞く限りだと、今のところはヘマをしていないみたいだが」

「だな。最後でミスったか？」

若い奴に有り勝ちな、焦りとか。

「いやいや。兎に角、時間をかけていったから上手くいってきたので、つい先日にデートのお誘いをしたで御座るが…」

「断られたんだな。そっか…、ザマぁ」

「今のトーリ殿の発言は酷くないで御座らんか!?　一応、その後も何度か誘ったで御

座るが断られ、理由を聞いてみたで御座るが…」
「あー、あー、あー。そっか。相手に彼氏が居たとかか」
「成程、それなら失敗するのも当然だな」
「……いや。彼氏は居ないとの話で御座った」
相手が居ないのに、デートの誘いを断られたのか？
「デートを断られて、付き合っている男性が居るかと聞いたら居ないと言われたで御座るが、その後「はい、ここで問題です」に――？」
「クロスユナイトは、相手の女性に何と言われて断られたでしょうか？」
「ハイ！『テンゾー君って、犬臭いから付き合いたくないわ』って断られました！」
「誰が犬臭いで御座るか!?」
「ふむ。『周りから変な目で見られるから、忍者の人と一緒にいるのはちょっと……』でどうだ？」
「それは自分の戦種（スタイル）の全否定で御座らんかウッキー殿!?」
「それなら…、『童貞の人と付き合うのは嫌よ』でどうよ？」
「――――――」
うん？　クロスユナイトが黙ったな。ってことは…、
「なんだ、当たりか？」

あ。頷いた。
「…覚殿が言った通り『彼氏じゃないけど、ソッチでの付き合いがある人がいるんだけど、とっても上手くて。だから、遊ぶのは良いけど経験が無い人とは付き合えないわ』との話で御座った…」
「「うわー…」」
凄いなそれ。最近の女って、そこまでオープンなんだな。
「まぁ、なんだ。取りあえず飲むか？　拙僧等は元服してても二十歳前で酒は本来駄目だが、飲まなくてはやってられない時もあるだろう」
「ほれテンゾー。この肉、焼けてるぞ。食えよ」
「二人とも…」
なに共感してんだ、この童貞共は。
「あ、そうだ。肝心なことを聞き忘れてた」
「覚殿、何で御座るか？」
「今回失敗した相手。名前って何よ？」
「うわぁ。それ、聞くで御座るか？」
「夜が強い相手が好みなんだろ？　だったら俺が挑戦しないと」
「スゲーなトカゲ兄い、節操無さ過ぎね!?」

「むむむ、リアルＮＴＲの発生が危ぶまれるな…」
いや、付き合ってる相手居ないんだろ？　だったらセーフだろ。
「えーと、取り敢えず相手の名前は、○○・○○○殿で御座る」
「……え？」
「ん？」
○○・○○○？　って事は、
「あー、クロスユナイト。そいつって、金髪で、髪の長さが肩ぐらいで、左目の処に泣きぼくろがあって、乳でかくて、身長が葵（弟）より若干低いぐらいじゃないか？」
「なっ!?　何で知ってるで御座るか!?」
うわ、やっぱり。そう言えば、言ってたな。
「え？　当たりかよ!?　トカゲ兄い、知ってたのかよ！」
「っは！　まさか井森、貴様…」
「あぁ。そいつが言ってたソッチが上手い奴って――――――――俺だ」
――――――――、
「か、覚殿ぉぉぉーーーーーーー!?」